【ならば仮初、されど永遠】

作・藤田ヒロシ

●キャスト

老婆（影１）……仮死薬を持ち、人形と暮らす者。

人形（影２）……「人形」の様に飾られている死体。

旅人……辿り着くべきものを持たぬ者。

激しい雨音。時折の雷鳴。

舞台にはテーブルとイス。テーブルの上には小瓶が置かれている。そこから少し離れたところに「人形」が飾られている。

人形　「ロミオとジュリエット」って物語知っているでしょ？ええ、そうよ。傷心と孤独ゆえの若い男女の純真を利用して、争い続く街に一時の平穏を手に入れた愚かな物語よ。

と、動き出す。

人形　違うわ！一時よ。人間は忘れる生き物。それに、何より争いが大好きで、ナンでもカンでも優劣を付けたがる生き物。勝者によって描かれる地図と歴史。力は正義。正義は力。平穏なんてほんの気まぐれ。それでは満足できない生き物……ええ、滑稽よね。

鳴呼、話が逸れてしまったわ。あの滑稽な物語の中でジュリエットっていう娘が飲むでしょ？一時死ぬ為の薬、仮死薬を。あれはね、錬金術の副産物で―

違うわ！「仮死薬」って言ったでしょ？「一時死ぬ為」と。ただ眠るだけの薬とは全く異なる代物よ。仮初の住処って言っても、雨をしのぎ、寒さをしのぎ、今夜そこで眠る事に変わりはないの。住処は住処。これだって同じよ。仮初の死って言ったって死は死。その味は本物。この世にある物では比べる物がない程の甘美。それを知った彼女はたちまちその虜に。だから目覚め時、そこになったのは絶望。だからすぐさま―

人形　違うわ！決して愛しの人が死んだから絶望したわけではないわ！希望のないこの世から、美しいあの世に戻りたかったのよ。ただそれだけ、ロミオの事は関係ないわ。

静寂

人形　鳴呼、また話が逸れてしまったわ。あれ？何の話をしてたの―

老婆が現れ、小瓶を手にする。

人形　鳴呼、思い出したわ。錬金術って知っているでしょ？ええ、そうよ。ナンでもカンでも混ぜ込んでありふれた物から金を作りだそうっていう愚かな行いよ。欲に毒され出来もしない事に時間と情熱を注ぎ込み、悩み苦しみ……滑稽よね。

違うわ！「滑稽」って言ったでしょ？「おかしな事」と。「無意味」だとか「無駄」だどか、そんなこと一言も言ってはいないわ。例えどんなに愚行に見えようとも、信じ込む力っていうのは時に、とんでもない物を生み出す事があって……ええ、そう。

小瓶を口にする老婆。身体がガクンと力なく折れる。

○老婆のあの世

ゆっくりと上体を起こす。見つめ合う老婆と人形。

人形　この髪、この胸、この唇。私の真実が、その髪、その胸、その唇。アナタの真実を愛した。

歩み寄ろうとする老婆だが、

人形　でもそれは遠い昔の物語。この手、この目、この唇、わかっているでしょ？ほら、もう……（唇を老婆の顔に寄せ）この目に光はない。二人は永遠を誓い、果たされなかった。それは真実。人間は忘れる生き物。平穏は一時。ええ、滑稽よ。されど、それが真実。それなのになぜ？受け止めてくれないの？その胸に触れる事も、その目で見つめる事も、その唇がこの身を熱く火照らせる事もないのに、仮死薬を一口、こうしてまた逢いに来る。死の味が忘れられない？

老婆　あの娘とは違う！

人形　どうかしら？

老婆　なぜだ？なぜそんなに冷たくするんだい？

人形　わからないの？この目に光はない。故にこの愛にも―

老婆　仮死薬までは辿り着いた。あと少し、すぐそこに……その目に光を取り戻せる。

人形　信じているの？

老婆　嗚呼、どんなに愚行に見えようとも。（小瓶を見つめ）仮死薬にあと一つ。此処まで来たんだよ。

と、人形に向かい手を伸ばす。触れそうとするその直前で、

人形　あと一つ。それが何かわかっているの？

老婆　……。

人形　ならば「あと少し」ではないわね。
老婆　そんなことはない！
人形　あと幾つ試せばその一つに辿り着けるの？
老婆　……。
人形　あと幾つ？
老婆　……。
人形　あと一回。
老婆　！
人形　約束して。あと一回。ならば残りの一つ、教えてあげる。
老婆　知っているのかい！？
人形　約束出来る？
老婆　嗚呼。
人形　最も美しい物。それを仮死薬に混ぜればいいわ。
老婆　！
人形　されど、それはただそれでしかない。色でも形でも現わせない。さあ、どうすれば混ぜられるかしら？
老婆　……。
人形　さもなくば、それに勝るとも劣らない美しい物を。
老婆　……お前は私に何をしろと言うんだい？

老婆を抱き締める人形。その身が固まる老婆。

人形　ただ真実と共にありたいだけ。約束よ、あと一回。

と、老婆から離れ元の位置に戻る。

あげしい雨音。時折の雷鳴。

○老婆の部屋

灯りを持った旅人が現れる。
コップを持って現れる老婆。

老婆　旅の人、そんなところに居ないで。狭く古い家だが体を休める事はできるだろ？さあ、温まるよ。

と、コップをテーブルに置く。
旅人が灯りを消して近づこうとするが、

老婆　嗚呼、灯りはそのままにしてもらえるかい？生憎、蝋燭を切らしていてね。

その手を止めて、灯りをテーブルに置く旅人。そして、一礼して座り、

旅人　頂きます。

と、コップを手にし、一口。

旅人　これは温まる。

と、また一口。

老婆　こんな暮らしだが食べ物なら少し……。

旅人　いえ、それには及びません。此処へ来る途中に少しばかり、干し肉などを手に入れましたから。お気遣いありがとうございます。

と、持っていたカバンを見せる。

老婆　嗚呼、そうかい。それは良かったね。

旅人　よろしければ、少しいかがです。お礼に―

と、カバンに手を入れるが、

老婆　それには及ばないよ。大切な食べ物だろ？

静寂……に耐えきれず飲み物を飲んだり、辺りを見回す旅人。人形に目が止まると、

老婆　町はどうだった？

旅人　え？

老婆　食べ物を手に入れたって事は、あの町を通ってきたのだろ？

旅人　嗚呼……どうだった？

老婆　色々と旅をして回っているのだろ？あの町はお前さんの目にはどう見えた？

旅人　（飲み物を一口）静かで落ち着いた、どこか懐かしい―

老婆　「静かで落ち着いた、どこか懐かしい」かい。

旅人　？

老婆　物は言いようだね。

旅人　いえ、本当に―

老婆　なら、お前さんの目は節穴だね。

旅人　！

老婆　嗚呼、気を悪くしたのなら申し訳ない。こんな暮らしだから話をするなど滅多になくてね。言い回しがどうも……申し訳ない。

旅人　いえ。

と、飲み物を一口。

老婆　今でも少しは残っているんじゃないか？古く朽ちているかもしれないがやたらとデカイ門を構えた建物が。

旅人　……確かに。

老婆　華やいだ時代もあったんだよ。町には人も物も溢れ、昼も夜もまるで祭りの様だった。

旅人　それがなぜ？

老婆　（鋭い視線を送る）

旅人　（ぎょっと息をのむ）

老婆　「それがなぜ？」と言ったね？

旅人　（頷く）

老婆　なぜだい？

旅人　「なぜ」？

老婆　お前さんはあの町についてこう言った。「静かで落ち着いた、どこか懐かしい」と。そして、私が「物は言いようだね」と言うと「いえ、本当に」と返した。なのにあの町に華やいだ時代があったと聞いて

発した言葉が「それがなぜ？」それ、おかしくないかい？

旅人　……おかしいですか？

老婆　嗚呼、おかしいね。華やいだ時代があったと聞いて、それがにわかに信じられない程に、あの町の今が朽ちて寂れていると感じていたから「それがなぜ？」だろ？「静かで落ち着いた、どこか懐かしい」が「本当」などと言うのは嘘……だろ？

旅人　（飲み物を飲み干す）

老婆　それならそうと初めから「寂れた町だった」と言えばいいじゃないか？どうして、そうも物事を印象よく言おうとする？どうして、己の感じた事を感じたままに言おうとしない？怖いのかい？

旅人　「怖い」？何を？

老婆　おかわりは、どうだい？

旅人　……。

老婆　ん？口に合わなかったかい？

旅人　いえ、そんなことは……。

老婆　ん？

旅人　では、頂きます。

と、コップを出す。それを受け取り消える老婆。

静寂

大きく一つ息を吐く旅人。辺りを見回し、人形が目に入ると、灯りを持ってそれに近づく。

旅人　美しい。

と、その手を伸ばすが、

老婆　触るな！

驚き、手を引っ込める旅人。目を合わせる旅人と老婆。

旅人　嗚呼、申し訳ありません。あまりにも美しくつい―

老婆　はい、どうぞ。

と、持っていたコップを差し出す。

旅人　頂きます。

と、コップを受け取りイスに戻り、一口飲む。

老婆　誰にも触らせたくないのだよ。

旅人　え？

老婆　（人形に近づきながら）大切なモノでね。驚かせてしまったね。

旅人　いえ……嗚呼、少し。

老婆　お前さんにもあるかい？

旅人　……。

老婆　誰にも触られたくないモノだよ。

と、人形の髪を手の甲で撫でる。

旅人　さあ、どうでしょう。

と、飲み物を飲む。

老婆　わからないのかい？それとも、それを探しているのかい？

旅人　え？

老婆　（じっと旅人を見て）色々と旅をして回っているのだろ？

旅人　……。

老婆　（更にじっと旅人を見て）お前さん、旅の人なんかじゃないね。

旅人　そんなことはありません。私は旅人。

老婆　（グッと旅人に近づいて）なら、何の為の旅なんだい？

旅人　それは……。

老婆　それは？

旅人　！

と、身体に異変を感じる。コップを見る。

老婆　それは？

旅人　こ、れ、は……一体……。

と、呂律が怪しくなる。

老婆　こんな町外れまで。それは本当に旅なのかい？

旅人　わたしは……たび……びと……

とコップを持ったまま、眠ってしまう。

老婆　（垂れ下がった腕からコップを取り）口に合うといいのだがね。

と、灯りを消す。

あげしい雨音。時折の雷鳴。

○旅人のあの世

テーブルには灯り、イスに座り眠っている旅人。それを離れて見つめている影１・２。

目を覚まし、辺りを見渡す旅人。

旅人　私は湖の畔の小さな町で育った。春には花々を、夏には涼を、秋には果実を求め人々がやって来た。冬は冬で何の無いがそれを求めやって来た。

人々が運んでくる風はいつも新鮮で、幼い私に多くのものを教えてくれた。着飾ったその姿は都会の華やかさを、日常を脱ぎ捨てた姿は人間の欲深さを、眩しい笑顔にはこの世の光と闇を教えてくれた。だから私は小さな町を出なくても窓を開けさえすれば世界を見渡せた。私は旅人だ。

と、灯り（消えている）を手にする。

影１　愚か者だ。

旅人　旅人だ！

影１　笑わせるな。灯りが無く進むべき道は見えない。それで旅を？愚行だね。

旅人　いや違う！私は―

影１　愚か者だ。

旅人　旅人だ！例え進むべき道が見えず、立ち尽くしている者に見えようとも、私は旅人だ。

影1　自分の足で、自分の手で、自分の求めるそれを求め、雨に打たれ、風に吹かれ、太陽に焼かれ、汗と血と涙を流し、泥水を啜り、這いつくばって……それが旅人だ。お前はただその真似事している……いや、真似事をしている者を見ていただけの者。小さな町で、小さな部屋で、小さな窓からね。

旅人　いや違う！私は―

影2　疲れている。

旅人　疲れてなどいない。

影2　恐れている。

旅人　恐れ？私が！？笑わせるな！私は旅人だ！暗闇など恐れない！私は旅人だ！

影1　まだわらないのか！愚か者！進む為に進むのではない。此処ではない何処かへ進むのが旅人ではない。辿り着くべきものを持っているから進む。それが旅人だ。何の当てもなく暗闇を進むなど、そんな愚行は決してしない！それでも行くというならば、お前は真の愚か者だ。

旅人　違う！私は―

影2　疲れている。

旅人　私は―

影2　旅人とは暗闇を恐れるものですよ。恐れを持たぬ者は過ちを犯すもの。（旅人の耳元で何かを囁く）

旅人　！

と、力なくイスに座る。

消える二つの影。

激しい雨音。時折の雷鳴。

○老婆の家

イスに縛られ、目隠しをされている旅人。飾られている人形。

老婆　死の味は口にあったかい？

旅人　何の真似だ！

老婆　なあに、怖がる事はない。この黒く艶やかな髪を傷付ける事はしないよ。安心おし。

と、手が旅人の首筋をはい、

老婆　なあに、怖がる事はない。この白く澄んだ肌を傷付ける事はしないよ。安心おし。

と、抱きしめ、頬を寄せる。

老婆　で、どうだった死の味は？

旅人　死の味？

老婆　お前さんは今、あの世に行っていたんだよ。

旅人　あれはただの夢では―

老婆　違うね！ただ眠るだけの薬とは全く違う代物さ。

旅人　何を飲ませた？

老婆　聞いているのはこっちだよ！さあ、どうだった死の味は？

旅人　……あれが本当にあの世……。

老婆　誰かに逢わなかったかい？逢いたい人に逢わなかったかい？

旅人　……逢いたい人。

老婆　（興奮して）やはりそうかい！嗚呼、これは神の思し召しか、それとも……まあなんでもいい。よく来てくれたね、旅の人。

と、消えていた灯りに火と入れる。

老婆　最も美しい物を仮死薬に。すれば完成される。あの目に光を取り戻す為の薬。愛は最も美しい。色でも形でも現わせない。ならば、どうする？

と、灯りを手にして若い女の顔を照らす。

老婆　孤独、それは美しい。何者にも侵されず、何者にも奪われない。さあ美しき者、その美しき目を仮死薬に！

声を上げようとする旅人だが、その寸前に老婆の手が口を塞ぐ。そして

目隠しを外す。その目を強く閉じている旅人。

老婆　さあ、その美しき目を見せておくれ。そして！その目で永遠を見させておくれ。

と、もう片方の手で目を開けさせようとするが、激しく抵抗する旅人。

老婆　お願いだよ。暴れないでおくれ。その髪を傷つけたくはない。その肌を傷つけたくはない。さあ、瞳を見せておくれ！

と、一層激しく抵抗する旅人に対し、両手で目を開けようとする老婆。

旅人　止めてください！どうか！どうか！

老婆　さあ、見せておくれ！

旅人　止めてください！どうか！どうか！私にはまだ見たいものがあるのです。どうか！どうか！私は旅人だ！進まなければいけない！どうか！どうか！

老婆　何を見ると言うんだい？お前さんは旅人ではないだろ？

旅人　私は旅人だ！

老婆　さあ、その美しき目を見せておくれ。そして！その目で永遠を見させておくれ。

と、目を開けさせようとする。

イスに縛られたまま暴れ出す旅人。老婆を振り払い、その勢いでイスごと倒れる。その弾みで拘束が解ける。

旅人　辿り着くべきものを持たない。それでも進む……滑稽ね。それでも例えどんなに愚行に見えようとも、私は進まなければいけない！

と、溢れて来た涙を拭う。

静寂

老婆　涙かい？泣いて―（言葉の飲み込み）……美しい！そうか！恐れもまた美しい。その証としての涙ならば！！

と、小瓶を手に、旅人の涙を入れようとする。

抵抗する旅人。

老婆　嗚呼、恐れているんだね、美しい！

と、後ろから頭を押さえ、涙を小瓶に、

老婆　勝るとも劣らない美しい物。嗚呼、これで光が！光が！！

と、小瓶を人形の唇につけ、強く抱きしめる。

静寂

一向に動き出す事がない人形。

老婆　なぜだい？どうしてだい？

と、再び飲ませる。しかし、何も起きない。

老婆　なぜだ！孤独の目から溢れた恐れの涙、なのになぜだ！！私は何を間違えている？一体何を！教えてくれ！答えてくれ！

と、人形を激しく揺する。すると、人形が崩れ落ちる。

老婆　（我に返り）嗚呼、大丈夫かい！？許しておくれ！許しておくれ！

と、人形を元に戻す。

旅人　仮死薬……ジュリエットの薬。彼女と同じように一度試せばその甘美の虜となり、恐怖を越えられると思ったのですか？あなたにこの目を捧げると？

老婆　（黙って人形の身なりを整える）

旅人　彼女はその甘美の虜となったわけではない。ましてや愛しの人が死んだから絶望したなど、そんな都合のいい話ではない！自分の真実が認められないと知り、孤独を知った。華やいだ暮らしは自分の真実を侵し、奪うもの。闇とも同じ。ならば真の闇へ。ただそれだけ。死の味もロミオの事も関係ないわ。されど、それは間違っている。無意味だと感じても、希望を見いだせなくとも、何が起きて、何があっても、一時の失望で、永遠を選ぶべきではない。彼女は生きるべきだった。そして、知るべきだった。生きてこそ、進み続けてこそ、自分の真実を証明できるのだと！だから、あなたが生き続けている事は間違っていないのですよ！されど、あなたは間違っている！

静寂

老婆　（大声で笑い出し）何を言い出すかと思えば、なんだいそれは？

旅人　どれほど理不尽だろうとも、どれほど受け入れられない事だろうとも、それが愛する人の真実ならば！見つめなければならない……そうだと、わかっているのでしょ？

老婆　お前に何がわかる！仮死薬で逢うべき者を持たぬお前に何がわかる！笑わせるな！

旅人　逢うべき者を持たないわけではありません！

老婆　逢っていないのだろ！

老婆を掴み、

旅人　持たないからではない！いつだって（自分の胸を掴み）此処に。もう二度と逢えないと知ってはいる。されど此処に居る！あなたも（老婆の胸を掴み）此処に。そうでしょ？

静寂

老婆　知った風な！辿り着くべきものを持たぬお前に何がわかる！笑わせるな！

と、旅人を突き飛ばす。

旅人　華やいだ時代も今は昔。所詮、平穏は一時。偶然その時代に生まれただけの事。されど、窓からは春も夏も秋も冬でさえ同じ風景。それがこの世だと思って眺めていた。それなのに！人間は欲深き生き物。それに、何より争いが大好きで、ナンでもカンでも優劣を付けたがる生き物。勝者によって描かれる地図と歴史。突然ではなく必然。いつだって、あと少し、すぐそこに。争いは仮初を破壊し、真実を曝け出した。私も愚かな生き物の一人でしかない。滑稽だ。それでも、進まなければ！灯りが無くとも、道が見えなくとも、進まなければならない！例えどんなに愚行に見えようとも、私は進まなければいけない！なぜならば！私は、生きている！

静寂

一つ鼻で笑う老婆。それによって力が緩んだ旅人の腕を離す。

老婆　やはり愚か者だね。

旅人　確かに辿り着くべき永遠の平穏は見えない。どの道を進むかなど尚更。暗闇を恐れないわけではない。自分を疑わないわけでもない。されど、進む。

と、灯りを持ち、一礼して去ろうとするが、

老婆　旅人には辿り着くべきものだけでなく、帰る事の出来るものも必要だよ。

旅人　……。

老婆　それも持たぬというのなら、いつでも此処に帰っておいで。狭く古い家だが体を休める事は出来るだろ？

いま一度、礼をして去る旅人。

イスに座り、小瓶を眺める老婆。

老婆　わかっている。約束は約束。こんな出来損ないでも、私にとっては救い。例え一時、例え愚かでもね。滑稽だと笑うかい？

と、胸に手を当てる。

ゆっくりと動き出し立ち上がる人形。

人形　わかっているわ。だから笑う事はできない。愛は最も美しい。色でも形でも現わせない。愛はただそれでしかない。都合良くはいかなわ。それでも……（首を振り）さあ、今は休んでください。

老婆をそっと包むように抱き締める人形。

老婆　嗚呼、そうだね。

人形の手に触れる老婆。

FIN

無断での転載・転用・使用を禁止